

キクの発蕾後の電照による開花遅延効果

キクの発蕾後の電照は、草姿に影響することなく、4～5日間の開花遅延が可能である。

背景・目的

- ・キクの収益性を高めるには、出荷計画に基づく生産体系を確立する必要がある。
- ・キクの消灯後の到花日数は、気温等の環境要因の影響を受けて変動し、特に、露地栽培では温度管理ができないため、到花日数が変動する。
- ・電照による日長制御技術を応用し、開花の早晚が確認できる発蕾期から再度電照を行うことにより、どの程度の開花遅延が可能かを検討する。

成果の内容

○発蕾から概ね10日間に電照を行うと、草姿に影響せず、開花遅延効果が認められる。それ以降の電照は開花遅延の効果がない。

○発蕾期から10日間程度電照を行うことで、開花期を4～5日遅延できる。



秋スプレーギク「モゼフレーム」の開花状況，1月25日（消灯45日目）

図中の数字は開花の遅延日数，電照マークは発蕾から5日刻みである

導入
メリ
ット

- ① 収穫日を遅らす必要が生じたときの技術として利用できる。
- ② 温度等の環境要因の制御が困難な露地栽培で有効である。

期待される効果

収穫日を遅らす必要が生じたときの技術として利用できる。

普及対象・範囲
キク栽培農家